

# みんなのねがい

第78集

1994 第24集



1995 第26集



1996 第28集



2005 第46集



2007 第50集



2006 第48集



あの時、中学生だった景子さんがお母さんに



## これまでのあらすじ

景子は中学・高校時代、部落差別の起  
こりや実態などについて、両親や祖父と  
ともに話し合い、理解を深めてしまし  
た。母や祖父は人権講座や講演会に進ん  
で参加し、その学びをもとに景子に語り  
かけていきました。

大人になつた景子は、恋人・憲治を家  
族に紹介する中で、憲治の姉に関する結  
婚差別の現実を知り、また、被差別部落  
出身の友人から誇りをもって生きるこ  
との大切さを感じられる手紙を受け取  
り、結婚差別を身近なこととして受け止  
める経験をしてきました。

そして、景子は憲治と結婚。現在は、両  
親や祖父と離れ、憲治と中学生の徹、小  
学生の詩織の4人で暮らしています。

世界は「新型コロナウイルス感染症」の猛威に  
さらされています。

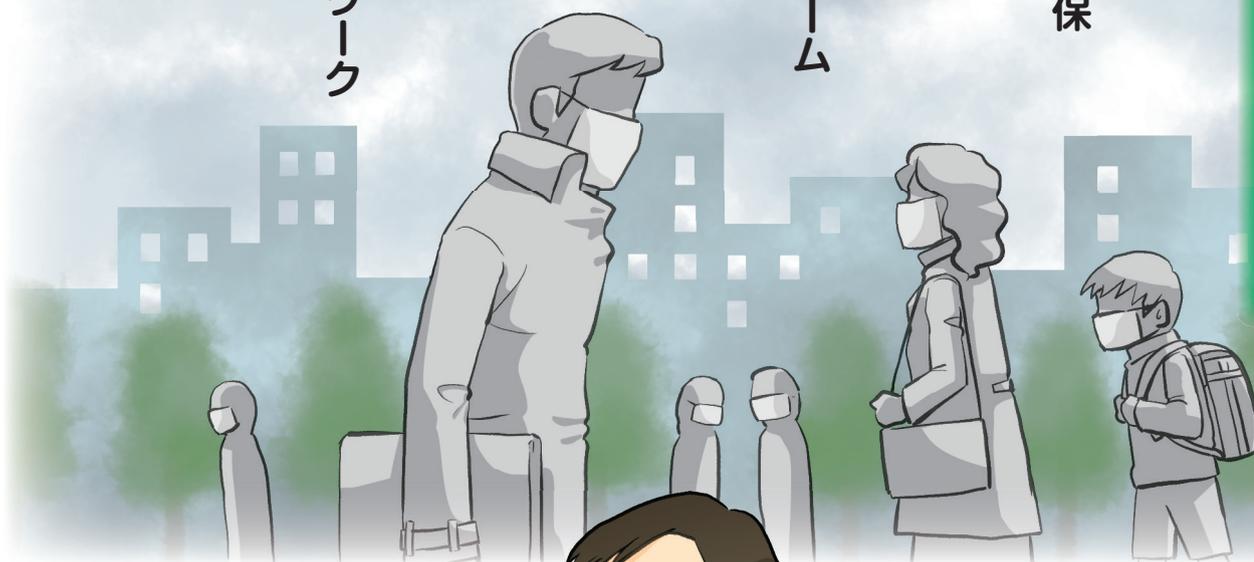
### 身体的距離の確保

### ステイホーム

### 3密回避

### テレワーク

### 新しい生活様式



憲治の同僚が新型コロナウイルス  
感染症に感染しまし  
た。憲治本人は濃厚接触者と  
はならなかったのですが、P  
CR検査を受けることにな  
り、その結果が出るまで自宅  
待機していました。

陰性だったんですね。  
はい、わかりました。  
ご連絡ありがとうございます。

憲治

景子 ただいま。

憲治 おかえり。たった今、連絡があつて、PCR検査、陰性だったよ。

景子 そつ、ひと安心ね。と聞いて、今日、公民館に行ったら、このチラシが置いてあつたからもらってきたの。

憲治 「やめようえー！ コロナ差別」か…。本当にいろんなことが起つてくるらしいな。

憲治 「やめようえー！ コロナ差別」

か…。本当にいろんなことが起つてくるらしいな。

## 「コロナ差別」の事象

医療従事者が、「店舗の予約拒否」「幼児教育・保育施設の卒園式への出席拒否」「タクシーの乗車拒否」「身内の葬儀への参列拒否」などの被害に遭う。

医療従事者の子どもが、同級生に「お前のお母さん、病院で働いているんだろ。菌持ってくるんじゃない」と言われる。

感染者が仕事で着用する制服を、家族に頼みクリーニング店に持って行ってもらったところ、クリーニング店から連絡があり、「コロナの洗濯はできません」「洗濯物を取りに来てください」と言われる。

レストランで、感染者が在籍する大学の関係者の入店をお断りする紙が貼られる。

SNSに「感染源の店」「コロナ患者が働いている」「コロナ患者が立ち寄った店」などの書き込みがされる。

他県から転勤してきたら、子どもたちが「コロナ県」と言われるなどいじめられたり、県外ナンバーの車を見て「観光自粛なのに、県外から何しに来たのだ」と言われたりする。

これ、見て。



景子 本当にいろんなことが起こっているね。ひどい。

憲治 一人で家にいる間、いろいろと考えたよ。他人事だとは思っていなかったけど、いざ自分も考えると、すごく怖くなっただ。

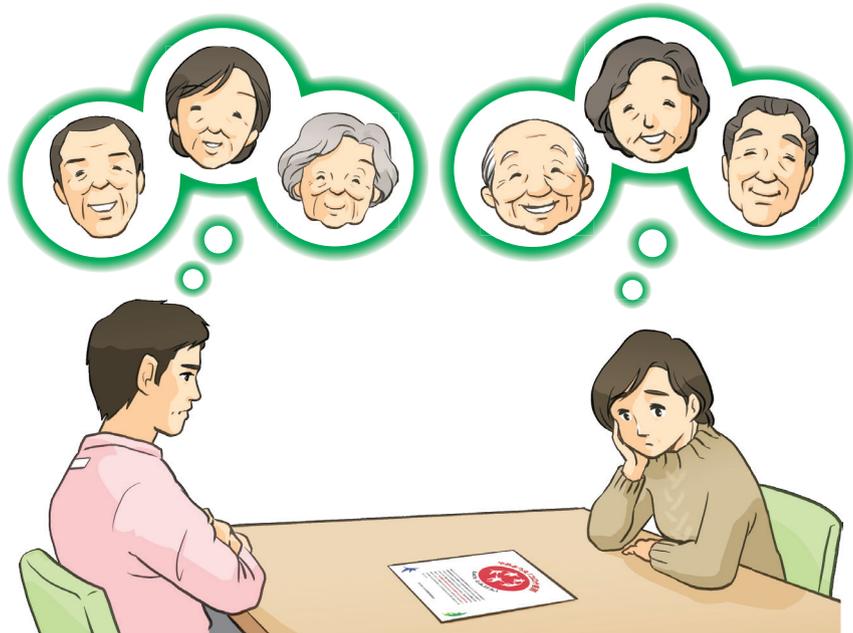
景子 なぜ偏見や差別が起こるのかな。

憲治 自分が感染したくない、家族に、特に親や祖父母は重症化するリスクが高いから感染させられないという気持ちが最初にあると思う。それは今回痛感したよ。病気を避けたい気持ちが人を過剰に遠ざけ、避ける気持ちにつながっているんだろつな。

景子 感染症といえば、何年前、ハンセン病回復者がホテルの宿泊を拒否され、それを訴えると被害者であるハンセン病回復者の方が責められたという事件（※）を母から聞いたことがあるわ。

憲治 ハンセン病については、強制隔離の歴史もあり、今でも苦しんでいる人がいるんだよね。

景子 誰だって感染したいわけじゃない。どん



憲治 そうだね。それは部落差別や様々な差別と同じだね。

なに努力したって感染することだってある。感染者は被害者なのに不利益をこうむるのはおかしい。被害者を責めても問題は解決しないの。

※ハンセン病元患者宿泊拒否事件については、「みんなのねがい第77集」をご覧ください。大分市のホームページ内で「みんなのねがい」で検索するとバックナンバーがあります。

徹・詩織 ただいま。

景子 お帰り。あら一緒だったの？

徹 お父さん、検査、どうだったの？

憲治 陰性だった。感染していなかったよ。

詩織 よかった。明日から会社にも行けるのね。

憲治 ああ。心配かけたな。

徹 あっ、このチラシ見た。教室にも貼っているよ。

景子 そうなの。お母さんは公民館でもらったのよ。いろいろな所にあるのね。さあ、手洗い、うがいをしておいで。



詩織 徹

詩織 お父さん、感染した人は大丈夫なの？

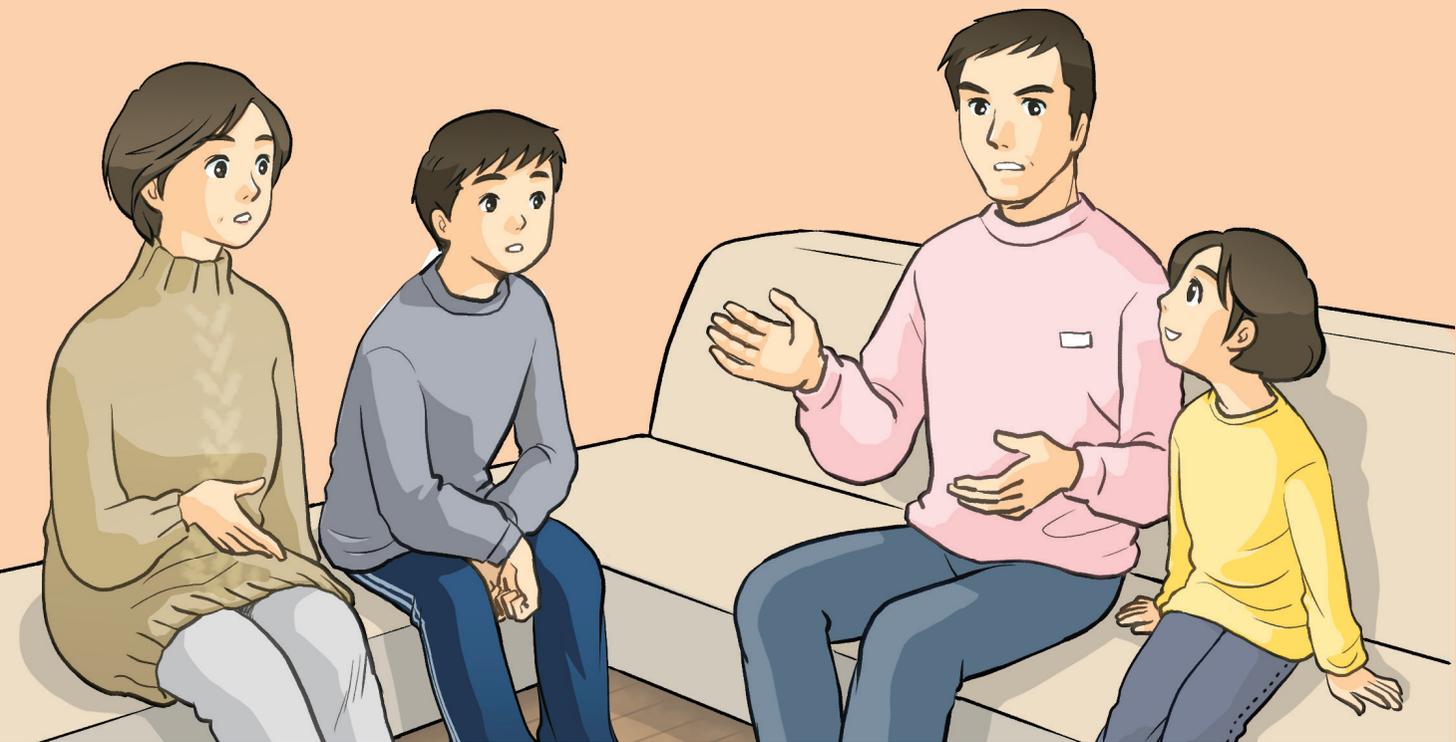
憲治 最初は熱が高かったけど、少しずつ回復しているらしいよ。

徹 その人、どんな気持ちだったのかな？

憲治 父さんが最初に電話を受けたんだ。その時、彼は「申し訳ない」ってすごく謝っていたんだ。父さんは「そんなことないよ」と答えただけど、正直「ついに感染者が近くで出てしまった」って不安になって次の言葉が出てこなかったんだ。すると、上司が受話器をとってはつきりと「謝ることじゃないよ。逆に助かっている」と言ったんだ。

詩織 えっ、助かっている？

憲治 そつ。父さんもそつ思った。すると上司は「感染は誰にでも起こる可能性がある。今回、早く正しく伝えてくれた。だから、会



社は感染を広げないための対策を素早く進めることができるんだ」って話したんだ。

徹 そつなんだ。

景子 母さんも、会社で言われたわ。「調子が悪いのにそれを隠して無理して悪化させたり、感染が広がったりしたら仕事が回らなくなる。自分や家族の体調が悪いときは遠慮なく言っしてほしい」って。

徹 本当のことを何でも話せる雰囲気をつくっていくことが大切なんだね。

詩織 お父さんの会社の人は、安心して出てこられるね。

景子 そうね。きっと大丈夫よ。じゃあ、ご飯にしようか。

詩織

昨日の放課後、忘れ物を教室に取りに戻ったら、担任の先生がみんなの机と椅子の消毒をしていたの。



徹

僕も見たことあるよ。みんなが帰った後にしてくれていたことがわかったよ。

憲治

近くにも、みんなのために働いてくれている人がたくさんいる



景子

んだって、あらためて思うな。医療に携わっている人はわたしたちの命を守ってくれている。それだけじゃない。他にも頑張っている人はたくさんいるわ。

徹

長距離運転の人が荷物を運んでくれないと届かないし、パッカー車に乗っている人がごみを集めてくれないとたまっていくなだ。

憲治

そう。いろいろな人がわたしたちの生活を守るために頑張っているんだ。そんな人たちが差別され、傷つくようなことは絶対に許してはいけないんだ。

詩織

わたしは、ごみ袋に感謝の手紙が貼ってあるのをテレビで見たの。あったかい言葉が広がると嬉しいな。

景子

そうね。わたしたちの言葉一つで人の心を温かくすることもできる。今、苦しい状況だけど、感染した人、その家族が安心して言葉をかけていけるといいね。そのためには、わたしたちが差別や人権についてもっと学びを深めていくことが大切ね。

ある施設で、新型コロナウイルスのクラスター(感染者集団)が発生し、入所者と職員など関係者の感染が続いていた。

そんな中、出勤した職員が、手書きで「がんばれ」と書かれたのぼり旗が正門にあるのを見つけた。職員の中で「誰かが立ててくれたんだろ」と話していた

数日後の朝、また、同じような旗が立てられていた。

この施設の代表者は「感染者を出してしまったことでのいような不安があったけれども、旗を見て少し心が安らぎました」と語り、また、感染発覚後に寄せられた電話も全て激励だったといい、「人は支え合って生きていくことにあらためて気づかされました」と話していた。



## 心の距離をあげないで

豊かな心を育む人権・同和教育